

If it is the intention to collect a scientific Library on the History of the Liturgy, quite a different type of bibliography is necessary. E. g. editions of Sacramentaria, Rituals; monographies on particular problems. But I suppose that the Doshisha will not immediately be interested in this kind of books.

(F. コイラス)

Eduard Schweizer; *Noetestamentica*, German and English Essays 1951-1963, Zwingli Verlag, Zürich, 1963, 448 pp.

I

イエスの到来は礼拝の理解に根本的な変化をもたらしている。礼拝はもはや世俗的な生活から峻別される神聖な行為ではなく、主に世俗的な日常生活を意味するものと考えられている。

「宗教的儀式をあらゆる普通のことば（犠牲, sacrifice, ささげ物 offering, 礼拝 worship）は新約聖書においては教会の礼拝（service）のための集会を意味することばとして全く用いられていないことは注意に値する。（使徒行伝13章2節における礼拝（worship）のは、その唯一例外である。宗教的儀式をあらゆることばらは新約聖書の中にしばしば用いられているが、それらの場合は専らユダヤ教（またはその他の異教）の儀式をあらゆることばとして限られた意味に用いられている。）教会の礼拝（service）はそれとは逆に教会の会員によってなされる教会員相互間の奉仕、あるいはこの世に対する日常の奉仕を意味する（ローマ人への手紙12章1節以下）か、またはある教会が使徒を支援するために為す特別な奉仕を意味している（ピリピ人への手紙2章30節）。そこでは真の交りと、互いに兄弟姉妹であることを証しするような日常生活やあらゆる社会的援助をあらゆるために、明らかに宗教的な表現が選ばれている。」(p. 333)。

このようなことばの使用は、初代のキリスト者が彼らの集会を宗教的儀式と混同されることを避けようとしている事実を示している。これは現代の神学に対して新しい問いを投げかけるものであるといえるであろう。キリスト者の集会とその場所をあらゆるのに、キリスト教以前の古い宗教用語（礼拝 worship 聖礼典 sacrament, 祭壇 alter, 聖所 sanctuary, その他）がキリスト教によって数世紀にわたって使用されてきている事実、キリスト者の集会が宗教的、儀式的な行為と混同されてしまっていることを示しているものではないであろうか。現代の神学はこの間かけに答えるために、新約聖書におけるキリスト者の集会の非宗教的理解の意義を見出し、教会の集会の宗教的形式に対して新たな疑問を発しなければならぬ。

II

「新約聖書において（コリント人への第一の手紙2章20節, 14章23節, 使徒行伝1章15節, 2章1節, 44節, またある写本においては, 使徒行伝4章26節, コリント人への第一

の手紙7章5節教会の礼拝 (service of worship) をあらわすために用いられている。ギリシャ語は、語原的には同じ場所へ集る。(あるいは同じ目的のもとに集る)」という意味をもっている。」(p. 333).

教会の礼拝の主要な特徴は教会のすべての会員が共に集るということであり、信徒が現実には、具体的に共に集められていることのみがそれを日常の礼拝 (service) から区別する (p. 333以下)

このキリスト者の集いの持つ特徴は、建築様式の上にもあらわされなければならない。すなわち「教会堂は、そこにおいて礼拝を行う者たちが互いに相見合うことができるようなものであり、会衆が現実的に共にあることを意識し、さらにその交りを促進するような構造であることが望ましい。キリストのからだは、その集会において全体の中心を持つことは事実であるが、しかしそれは前列の人々のうなじより見ることでできないような兵士の縦隊であってはならない。それは相互の呼びかけや問いかけ、反問や慰め、あるいはキリストの助けと彼の賜物の支えの中に生きている会員よりなる一つのからだである。」(p. 336)

1世紀のキリスト者はまた神聖な建物としての教会堂をもっていなかったことが知られている。彼らは自らを(神の宮)であると理解し、世俗的な建物の中で集会をもっていた。この事実は必ずしも教会堂の建築を廃棄すべきことを意味するものではない。しかし最初の1世紀を通じてキリスト教が教会堂をもたなかったこと、および生ける神の宮としての革命的自己理解を堅持していた事実は、現代のキリスト教に対する1つの警告であり、この世における宣教に仕えるための真の集会の場合を建設するように促すものである。その事実は礼拝のための神聖な場所を建てようとするすべての傾向に対して反対し、集会の場所を建てることによって社会に奉仕しようとする努力を呼び起すものである。

III

呼び集められた教会の集会には3つの基準があり、それらはすべて神の生きたことばとの出会いの相異なる面をあらわしている。

1. 「そこで語られ、為されるすべてのことは、人間の宗教的能力によるものではなく、イエスは主であるとの告白に基づく。」(p. 337 コリント人への第一の手紙12章3節)

2. 「教会の徳が会員1人の行為によって高められるときは常に神の霊が共に働いており、またイエスが主であることが宣言されている。私達はパウロが決して個人の徳が高められることについては語らず、常に会衆全体の徳が高められることについて語っていることに注意しなければならない。」(同上)

3. 教会の集会において語られることは教会の外にある者にも理解できるものでなければならぬ。「パウロにとって礼拝 (service) において語られる説教や祈りを評価する主な基準は教会の外にある人達の理解であった。」(p. 339)

このような著者の研究の成果のあるものを一般化して一定の組織の中に組み入れることは著者の意図に反することになるであろう。Eduard Schweizer は教会を具体的に考えて

おり新約聖書の相異なる伝統に従って語る諸教会、および現代の諸教会の問題を扱っているのである。礼拝に関しては非常に異った理解が過去においても現在においても、なされている。礼拝の問題はまた同時に教会論の問題でもある。上に述べた3つの基準は従って特定の教会論すなわちパウロの教会論を含んでいることが認められなければならないであろう。著者は“Gemeinde und Gemeindeordnung in Neuen Testament”（「新約聖書における教会と教会職制」）2nd edition, Zwingli verlag, Zürich, において新約聖書における種々の教会論の伝統を詳細に論じているが、しかし、その多様性の故にパウロの教会論に基づく1つの問いかけをここに受け入れ現代のキリスト教の集会をそれらに照合することをためらう必要はない。それによって極めて刺激に豊む多くの問題が提起されるであろう。以下にその中のいくつかを挙げる。私達はイエスが主であることをいかにして非宗教的な方法で表現するか。いかなる目的のために教会堂を建てるか。キリスト者でない労働者、無神論者、快樂主義者の心に触れる説教の意義をどう評価するか。

IV

教会における集会の意味は説教と主の晩餐の問題についての考察によって一層明らかにされるであろう。「新約聖書の時代には「説教」(sermon)ということなかった。説教(sermon)に相当するギリシャ語は語原的には「聞くこと」を意味しており、当時はしばしばそのもとの意味に用いられていた。」(p. 335)。パウロにとっては「説教(preaching)は第一に予言を語ることを意味していた。彼はそのような予言の効果についてコリント人への第一の手紙14章24節以下に述べている。予言をすることは正統的信仰の条項を教えることではなくむしろキリスト者の信仰を聞く者の立場から理解できるように表現することである。」(p. 340)「新約聖書の教会においては、異教徒への宣教のための説教(preaching)のない礼拝、あるいは会衆の中の1人のみが語って他のすべての者はただ聞くためにのみ集る礼拝は見出されない。」(p. 335)、すべての会衆が説教の賜物を与えられているわけではない。しかし、「すべての集会には種々の語り手が多数」(同上)いたことが知られている。

「説教(sermon)をはかる基準は霊である。「パウロは神の霊の働きを見分ける3つのしるしを挙げている。その第一は、聖霊は『全体の益』(コリント人への第一の手紙12章7節)のために語るということである。霊は『教会の徳を高めるために語る』(14章4節)。霊はまた教会のすべての会員がその語ることを理解できるように語る(14章2節6節~12節)。このことは神の霊は常に同時代の人々の全体に向けられていることを意味している」(p. 223)

「現代の人間に対する燃えるような愛をもたない説教や、現代の世界においてもはや理解されることのなくなった死語による説教は聖霊による説教とはいえないであろう。」(同上)。「語るものが空しく空中に語りかけるのではなくして現代人のことばで、現代の人間の必要や望みや危険を知って彼らに向って語りかけるということが聖霊のしるしである。」(同上)「パウロによる霊のことばを識別するもう1つの基準は、イエスが主である

という証言である。」(p. 227)。「この世に対する彼(神)のことは肉と血とを持った一人の人間であり、木に掛けられて殺された実在の人間である。今世紀の初頭30年間における精神化された説教は、パレスチナの歴史から全く分離されており、ちょうど生命を吸収している土壌からその根を抜き取られた樹木にたとえられるであろう。」(同上) Schweizerは本著において福音を現代人の理解に近づける多くの試みをなしている。彼は「2つの新約聖書の信条」(コリント人への第一の手紙15章3~5節とテモテへの第一の手紙3章16節)を比較し、「説教の意味、特に福音を聞く者のことばや思考形式が全存在に移し変えて表現することの意味を問うている。」(pp. 122, 110-121, 407-415)

V

本著にはまたサクラメントについての非常に重要な記述が載せられている(pp. 344-370)ここではその中から一個所だけ引用することにしよう。「彼(パウロ)はコリント人たちの単に儀式的な主の晩餐の執行に警告を発している。彼によれば真の食卓の交りを持たない晩餐は主の晩餐ではない。コリントにおいて行われていた儀式は、イエスが『食事ののちに』(11章25節)杯をとったという古い習慣をとどめている。主の晩餐における会衆の食事はこのようにはじめはパンの配布と杯の供与の間に行われていた。しかしコリント人たちは遅れて来る者たち、すなわち所定の時間内に仕事から解放されて晩餐の席に列席することのできない奴隷たちを待たずにすむようにこの順序を変えていた。彼らが遅れてその席に着く頃には交りの食事はすでに済んでおり、奴隷たちは残りのパン屑とわずかのブドウ酒によって辛うじてその「サクラメント」に参加することができるという状態であった。そしてまさにこのような事態は「主のからだと血とを犯す」(11章27節、8章12節参照!)ことに外ならない」(p. 334)といわれているのである。

これらの考察によって礼拝に関する私達の伝統的な理解に大きな刺激が与えられる。新約聖書の理解は私達のこれまでのキリスト教の理解とは全ったく方向へ導く。そこでは日毎の食事、日毎の奉仕や他者との関係のような普通世俗的であると考えられているものが神聖である。また日常の生活が礼拝の場所であり、労働の場やくつろぎの場その他が真の聖所であると考えられている。そしてキリストのからだなる教会の会員の集るところは世俗的な意味における出会いの場であると理解されている。すなわち教会は新しい家族の集会の場所と考えられ、彼らはこの世における宣教の実践のためにそこに集るものと理解されるのである。(ヴェルナー・コーラー 扇田幹夫訳)

John Milton Kelly, EACC Hymnal, the East Asia Christian Conference, 1963, 200 pp.

此度 E. A. C. C. Hymnal が出版された事は、注目すべき偉業であります。それはアジアに於ける教会の創造力と云うものを示すものです。

このコレクションに於ける 200編の讃美歌の約半数の曲あるいは歌詞は、東洋の資料からとられ、他の半数は西洋のものからとられています。East Asia Christian Conference